

ニブラーズ、かじる虫たち⑤

穀粉をかじるマダラカツオブシムシ

宮ノ下明大

セミ爆弾に気をつけて

小学生の娘が「ねえ、セミが突然暴れ出してビックリすることを何て言うの」と突然質問してきた。「あー、あるあるそういうこと、うーん、とくに決まった表現はないんじゃないの」と我ながらつまらない答えをした。娘の話では、担任の先生が、出かけようとドアを開けたら、足下にセミが落ちていて、刺激しないように歩いたのに、突然鳴き出しビックリしたという事件に対して、『セミ爆弾』と名付けたというのだ。

盛夏を過ぎた頃、ベランダや階段にひっくり返った状態で動かないセミが落ちていることがよくある。そこを通りかかると、突然セミが鳴き出して、時には飛び回ってビックリしたという体験に、うなずいてくれるだろうか？マンション住まいなら、ベランダや外階段で遭遇する頻度が高い。

『セミ爆弾』、確かに爆弾級のビックリだよなあ、すっかり気に入ってしまった。この夏は、朝、登校する娘の背中に向かって、「階段降りるとき、セミ爆弾に気をつけて！」と声をかけた。セミ爆弾の正体は、私の住むつくば市ではアブラゼミやミンミンゼミであった。西日本ではクマゼミなのだろうか。



『セミ爆弾』

セミを食べる猫

我が家には、夏を楽しみにしているアメリカンショートヘアのデブ猫がいる。外には一歩も出ない飼い猫だが、ベランダには出入り自由である。彼の夏の楽しみは、ベランダに飛び込んだセミをハンティングすることだ。セミを捕らえると室内に持ってきて、「捕ったぜ、凄いだろ」と見せびらかして、しばらくするとバリバリと食べてしまう。ひと夏に10匹くらいは食べているのではないかと思う。アブラゼミもミンミンゼミも捕るが、食べるのはミンミンゼミが多い気がする。彼にとってミンミンゼミの方がおいしいのかもしれない。

最近、食べ方に変化があった。きれいに前翅だけを食いちぎって胴体を食べようになったのだ。たぶん、セミの翅は堅いので、食べたあとに喉や胃に刺さって痛い経験をしたのだろう。時々、食べたセミを吐いていることがあるからだ。吐くとわかっていても、彼はセミをハンティングして食べるのを止めない。

ベランダに出て、風を受け鼻からその匂いを体に取り込み、耳は細かく方向を変えながら周囲をうかがい、眼は遠くに獲物を探している。いつもは寝てばかりだが、ハンティングは野生の猫が現れる瞬間だ。そんなデブ猫を見ていると、とてつもなくかわいのである。

穀粉をかじるマダラカツオブシムシ

カツオブシムシというと、セーター(毛織物)の害虫というイメージが強い。ヒメマルカツオブシムシやヒメカツオブシムシが代表的な種類だろう。また、動物の骨格標本を作成するために、ハラジロカツオブシムシに肉をかじらせるという話を聞いたことが

あるかもしれない。

今回は、マダラカツオブシムシの仲間を紹介したい。この仲間の中で、日本で最も高い頻度で分布する種類は、アカマダラカツオブシムシと思われる。1990年代に平尾素一先生らが中心となって、フェロモントラップを用いたマダラカツオブシムシの調査が行なわれた。その結果、アカマダラカツオブシムシは、九州から東北地方の最も広い範囲で、最も数多く捕れた種類であった。



日本でのアカマダラカツオブシムシの分布

白丸はトラップに捕獲された地域

私の自宅ベランダでも、夏になるとフェロモントラップで捕獲できた。気がつかないだけで、屋外で普通に飛んでいるのだ。成虫は、体長約3ミリメートルと小型で、背中の色は黒に赤褐色の模様をもち、特に前翅の両肩に当たる部分に丸い模様があり、めがねのフレームのように見える。拡大して見るとなかなかきれいな模様である。よく見ると白い毛も生えていた。



アカマダラカツオブシムシ成虫

しかし、この模様だけで本種を見分けることはとても難しい。よく似た模様のヒメマダラカツオブシムシ、チャマダラカツオブシムシ、アメリカでは重要な害虫であるキマダラカツオブシムシと区別がつかないのだ。結局、交尾器を取り出して顕微鏡でその形をみて判断するしかない。私自身も、実際に見たことがあるのはアカマダラカツオブシムシとヒメマダラカツオブシムシの2種である。

カツオブシムシの仲間は、その名前から予想されるように動物性のタンパク質を好むと言われている。しかし、米糠でも十分に発育できるマダラカツオブシムシは、米や小麦の製粉工場などで害虫として問題になってもおかしくない（アメリカの精米工場では、キマダラカツオブシムシは重要な害虫として知られている）。私が調査した精米工場の内部からは、アカマダラカツオブシムシは採集されたことはない。日本の精米工場で害虫にならない理由はさっぱりわからないのだ。いや、そういう事例を知らないだけかもしれないが。日本では、野外の動物や昆虫の乾燥した死体をかじっていると考えられるが、鳥の巣や蜂の巣に生息しているかもしれない。

私は昆虫学者として、「アカマダラ、キマダラ、チャマダラ、ヒメマダラ」、この外見がよく似たカツオブシムシすべてをこの眼で見たいとワクワクしている。アカマダラの赤色、キマダラの黄色、チャマダラの茶色の微妙な色の違いを知りたいのだ。果たして実現する日が来るだろうか？

(2020年9月)